

H28年7月27日

中村桂子委員(アドバイザー)からいただいたご意見

- テーマについて考える視点として重要となるのは、「何が目的であるのか」だ。健康であることは、「楽しく、いきいきと生きられる」ということではないだろうか。今、世界でも日本でも痛ましい出来事が起きている中、権力や経済力を競う時代から落ち着いた暮らしの時代への変化を求める必要があると思う。
- そうした中で、今の社会を、「いきいきと生きられる社会」としていくために、何が課題なのか、何を变えていけばいいのか、どんなことができるのかを考え、そうした社会へとつながるものとなれば、大きな意義をもつ国際博覧会となる。1970年に開催された大阪万博のテーマに「調和」をいれたのは、時代を先取りした先進的な試みであった。日本は、先進的なコンセプトをつくる力がある国だ。今回、さらに、コンセプトだけでなく、それを実行性で世界を引っ張っていくものとなれば、新しい国際博覧会をつくるのが可能となるのではないか。
- 個人としては「人間は生きものであり、自然の一部」ということを基盤に「機械と火」の時代から「生命と水」の時代へと考えているが、これは一つの例であり、各委員からの提案で議論することが重要と思う。
- 今、新しいコンセプトや社会づくりで世界を引っ張っていける国は、日本だと考えている。欧米が生んだ現代文明の優等生となりながら、独自の文化をもち、新しい社会を提案する土壌がある。これからの社会では、自然との関わりが大切となる。日本は豊かな自然に恵まれた国であり、いきいきと生きる社会を提案するのにふさわしい。
- これまでのグローバル化は一律化するものであったが、現代文明が行き詰っている今、これからは、同じ地球の上で、それぞれの国がもつ文化の素晴らしさを活かし、力を出し合いながら、みんなで協力し合って取り組んでいくことが必要となる。そうした新しい社会をつくろうと発信する力をもっているのは、70年間戦争をせず、経済力も文化力もある日本ではないだろうか。  
国際博覧会を通して、心も体も健康で、いきいきと生きることができる新しい社会を提案できれば、大きな時代の転換点となるだろう。
- 未来を考えることは、子どもの可能性に着目していくことだ。長寿とは、結果であり、その根本にあるのは、「生きるということ」ではないだろうか。日本は、若者の自殺が多い国であり、健康な社会とはいえない状況にあり、元気に生きることができる社会のあり方を考える必要がある。全てが「子ども」から始まり、延長上に、若者、大人、そして高

齢者がいるという発想で考えてはどうか。

○価値観を変える転換期を迎えている。地球は 38 億年の間に、繁栄した生物が絶滅を繰り返して、今につながっている。まさに、今、問題となるのは「人間」だ。この国際博覧会のテーマが、自分たちの子ども、孫、ひ孫たちが、元気に生き続けられるよう、「いきいきと生きられる社会」をめざすことを明確にすれば、高齢者も自分の寿命を考えるよりも、より共感を得られるものとなるのではないか。

「長寿」の考え方も、個人でなく、人類がつづいていくという概念でとらえれば、意味をもつものになるだろう。

○「子ども」に着目し、大人が子どもに何をするかではなく、子どもの可能性を引出し、未来を考えるものにするのが面白そうな気がする。